JASE
現代性教育研究ジャーナル
MONTHLY JOURNAL of SEX EDUCATION TODAY

2023年
No. 142
2023年1月15日（毎月15日）発行

日本性教育協会
THE JAPANESE ASSOCIATION FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL https://www.jase.faje.or.jp 発行人 石川哲也 編集人 中山博邦
© JASE. 2023 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

SEE性教育アカデミー 2022報告① …… 1
SEE性教育アカデミー 2022報告② …… 4
いつきの“ヒューマン・ビーイング”㉒ …… 8
多様な性のゆくえ㊾ …… 9
今月のブックガイド …… 10
JASEインフォメーション …… 11

◉ SEE 性教育アカデミー 2022 報告①

性と対人関係について語る安全な場づくり

～ SAR につなげるネットワーキングスキル～

はじめに

SEE（Sexuality Education & Empowerment）は、「関西性教育研修セミナー」として各種講演・海外スタディツアーを企画してきた 10 年の実績を活かし、より系統だった性教育の学びの場を提供していくことを目的として 2018 年に開講した。これまで概ね年 2 回のペースでセミナーを開催してきた。

「SEE 性教育アカデミー」では、From What to Learn to How to Learn（何を学ぶかから、どう学ぶかへ）をモットーに、受講者との対話を重視したプログラムを展開している。講義内容に関する質疑応答だけでなく、ディスカッションや「ふりかえり」の時間を十分にとり、講師と参加者が共に学ぶスタイルをとっている。

2022 年 11 月 5 日（土曜日）に大阪公立大学 I-Site なんばの会場にて午前 10 時から午後 4 時 30 分まで行われた今回のセミナーは、2022 年 2 月に開催された「みんなで考えよう私たちの SAR プログラム」と同じく対面でのワークショップ形式で行われた。

SAR プログラムとは

SAR とは Sexual Attitude Reassessment のことで、性に関する教育や支援に関わる人が、性に関する自己の価値や態度と向き合い、再構築するための研修プログラムである。諸外国の代表的な性科学・性教育団体

において、その受講が「専門家認定」の条件にされているものである。このプログラムは、性に関する教育や支援に関わる人が、「性に関する自己の価値・態度」と向き合い、再構築するための研修である。

SEE は、参加募集のチラシに、次のように記している。

「性に対する内容は、不快さや不調、葛藤を生じさせるトリガーとなりうる刺激が含まれることが多い。だからこそ、性と対人関係を扱う支援者には、SAR のような自己覚知を目的とした研修が必要であり、学び合いのための安全な場づくりや適切な課題を選定するスキルも研修を行う際には欠かせない資質となる。」

今回の「SEE 性教育アカデミー 2022」は 、 3 部構成で行われた。

第 1 部
性と対人関係について語る安全な場づくり

第 1 部は、主催者挨拶の後、一人 1 分程度の講師、参加者の自己紹介が行われ、10 時 20 分から 12 時までの 100 分間、前回のセミナーに引き続き藤岡淳子氏（大阪大学名誉教授）を講師に、「性と対人関係について語る安全な場づくり」をテーマにグループワークを行った。このワークショップについては、SEE の共同代表である野坂祐子氏が 4 ページ以降で詳しくレポートしているので、参照いただきたい。ここでは、参加者の声（文責・編集部）のみを紹介する。

- 性という日本人には少し抵抗が強い領域の話をするうえで、場が安全であるということはとても大事だと感じました。みんなで最初に象の絵を描くことで、場に対する緊張感や抵抗感がかなり下がったと感じました。物理的な環境に配慮するという視点は、自分はおろそかにしがちだったなと気づいたので、これからは意識していきたいです。自分は今、何をどう体験し、それをどう自覚しているか、という視点を持ち続けようとする姿勢を大事にしていきたいです。
- 象の絵は、気づきを促すには、参考になりました。性への初めの意識など、思い出すことすらしなかったところまで、驚きの連続でした。
- 前回聞いたときは衝撃的すぎる内容だと感じましたが、今回は興味深く聴くことができました。SAR は仲間とともに様々な性のありように暴露されることで、これまで閉じられていた（自分自身の性に対する）扉が開かれてゆくプロセスなのかもしれない、と感じました。今回は驚きや抵抗は減っていましたし、興味深く感じるよう変わっている自分に気づきましたが、そういうのも一端なのかもしれないなと思いました。

第 2 部
支援者への影響
～性への支援や教育に関わるときに起こること～

昼食休憩（60 分）の後、13 時から「支援者への影響～性への支援や教育に関わるときに起こること～」をテーマに講義とワークショップが行われた。

講師は、臨床心理士・公認心理師で、性暴力・性虐待被害者等への心理療法が専門の吉田博美氏（駒澤大学学生支援センター常勤カウンセラー、SEE 事務局長）と同じく臨床心理士・公認心理師で学校や児童福祉領域での性的問題等に関する臨床・研究を行っている児童相談所や刑務所での治療研究に関するスーパーバイザーの野坂祐子氏（大阪大学大学院人間科学研究科准教授、SEE 共同代表）。

最初に吉田氏が、性暴力被害の支援を行っている立場から、トラウマ体験とその反応について話をされた。直後のトラウマ反応は当然の反応であり、共通の反応もあるが、人それぞれ反応が異なることを知ることが重要であるという。

トラウマ反応には、「恐怖と不安」「回避・感覚麻痺」「解離」「無力感」「自責感」「怒り・攻撃性」「孤独感」「不信感」「身体症状」等がある。大切なことは、見通しを持たせて、安心してもらうこと。トラウマ反応への適切な対応がなければ精神疾患を患い、生活に支障が出ることもあると、支援する立場にある者は自覚することが必要であると述べられた。

吉田氏の講義を受けるかたちで、野坂氏は、支援者として最も注意しなければならないのは、「助けたい」「治したい」「教えたい」という自分の気持ちを優先し過ぎるために起こる「～であるべき」「～しなさい」という支配的態度、パターナリズムに陥ることであり、これを避けなければならないと強調された。

お二人の講義後、「なぜ、この仕事・活動をしよう

と思ったのか」をテーマにしたグループワークが行われた。第２部のセッションには、以下のような参加者の声が寄せられている。

- 人を変えようとする気持ちが、仕事のやりがいやモチベーションにしている自分がいることで、場違いな発言をたくさんしてしまったなぁと感じています。凝り固まった考え方を壊す良い機会になりました。
- 支援者自身に起こる反応や症状に自覚的であることの大切さを感じました。仲間同士でお互いを気にかけあうことも大事だと感じました。そのためにも、ふだんから風通しの良い関係性を築くことが欠かせないと改めて思いました。「なぜこの仕事をしようと思ったのか」は、もう少し時間があったらまた違う深みがあったかなと感じました。

第３部
SAR（Sexual Attitudes Reassessment）の解説と体験

10 分間の休憩を挟んで、午後２時 10 分より SEE の共同代表である東優子氏（大阪公立大学大学院人間社会システム科学研究科教授）が「性に対する態度をみなおす・再評価する再構築する研修について」と題して、SAR の解説とご自分の体験について講義を行った。

東氏は、諸外国の SAR に関係する研修の具体的な内容を紹介され、最後にハワイ大学のミルトン・ダイアモンド教授の次のような言葉を引用した。

> 性に関して、ある種の感情や態度が伴わない「事実」は存在せず、感情や態度は、個人や社会の都合で「事実」さえも変色させてしまうことがある。

> 一般的な話題や社会的な傾向について話したり、教えたりすることの必要性がある一方で、一人一人の人間は「平均」と一致することもあれば、劇的に異なることもある。その人の問題を個別化することが重要である。

> 「何がどうである」「何がどうあるかもしれない」「何がどうあるべき」ということは、明確に区別して語らなければならないが、専門家の言説においても「事実」と「可能性・仮説」が常に明確に区別されているわけではない。「何がどうあるべき」（価値）については、常に意見が分かれ、流動的なものである。

第３部のセッションには、以下の参加者の声が寄せられている。

- どんなものにも驚かない自分になる。これは、知ったかぶりをするのとは違うので、動揺しない自分づくりとしては、大切だと感じました。
- 普段から自分自身の内側に起こることに気づきを向け続けたいとより一層感じるようになりました。性について語り合う場は、正直身の周りにはありません。だから性について、自分がどう感じどんな反応をするのかは、わかっていませんでした。率直にみんなでオープンに語れる場を作ってくださってありがとうございます。まずは支援者こそ、こういう体験をしてみることが大事なんだ、と強く感じています。

東氏の講義後、午後３時 40 分から午後４時 30 分まで、参加者 16 名全員のセミナーに対する感想が語られて終了した。６時間 30 分を超える研修会であったが、「一日中皆様の考え方や見方を語り合いながら、自分の考えも再構成できたと実感しています」という言葉が表しているように充実した一日であった。

次回の「SEE 性教育アカデミー」は３月 25 日（土）に同志社大学今出川キャンパス（京都市）で開催される予定である（詳細は 11 ページを参照）。

◉ SEE 性教育アカデミー 2022 報告②

性と対人関係について語る安全な場づくり

SEE 共同代表、大阪大学大学院准教授 野坂 祐子

ワークショップのねらい

性にまつわる教育や支援を行う実務家が自分自身の性に対する意識や態度を振り返る SAR プログラムの実施においては、プログラムの内容が妥当で効果的なものであることが求められるとともに、SAR 受講者が気づきを深められるような安全な場が不可欠である。実際に、これまで SEE が主催した SAR に関する研修においても、性について話し合うという「不慣れな」体験への戸惑いだけでなく、受講者自身の傷つきや信念に触れる「敏感な」内容への反応もみられ、さまざまな配慮の必要性を実感してきた。

性に関する内容に限ったことではないが、安全に語り合える場をつくる工夫は、SAR のみならず性教育を行ううえで欠かせない。さらに、健康的な関係性を育む包括的性教育を実施していくには、実務家自身が対等な関係性のなかで安全な対話を体験することが重要だと考えられる。

そこで、今回の SEE 主催の研修では、「性と対人関係について語る安全な場づくり」と題するワークショップを実施した。ファシリテーターを依頼した藤岡淳子氏は、一般社団法人もふもふネット代表理事として、性暴力に関する問題に取り組んでおり、加害行為のある人への治療教育や家族への支援等を行っている。個人への働きかけだけでなく、治療共同体（Therapeutic Community: TC）と呼ばれる安全な関係性と回復の場づくりを専門としており、官民協働の刑務所である島根あさひ社会復帰促進センターでの TC の運営にも携わっている。2020 年に公開された映画『プリズン・サークル』（坂上香監督）で、同センターにおける TC の実際をご覧になった方もいるだろう。生活を共にしながら、責任を分かち合い、対話を通して回復を遂げていく TC で取り組まれるのが「サークル」という語り合いの場である。このサークル体験を通して、SAR や性教育のあり方を考えようというのが本研修の目的であった。

みんなで「象」を描いてみたら…？

ワークショップは、会場にて円座になった受講者に向けて、藤岡氏からサークルについて説明されることからスタートした。TC において、サークルとは「自分自身を語る場」である。サークルの形状は、「上もなければ、下もない。始まりもなければ、終わりもない」という理念を表し、「一人ひとりの体験に、唯一無二の価値がある」と考える。円座になったときに中央にできる空間は、「生命の泉」のようなものである。ここに一人ひとりの経験や思いを注ぎ込むことで「豊かな泉」になり、そこからそれぞれが必要とするものを持ち帰っていくというイメージが語られた。

今回の研修も、人とつながる場であり、性教育を広めていきたいと願う人たちが集まっている。受講者同士がつながり、学び合うためには、さまざまな経験や

意見を共有し、多様な視点を知ることが大切だと説明された。

多様な視点を知るにはどうしたらよいか。感じていることを語り合い、それを認め合う体験が必要である。しかし、実際には「部屋のなかの象（Elephant in the room）」と表現される状況になりやすい。示されたイラストには、部屋の中央にいる大きな象が空間の大半を占めて、周りの人が窮屈にしながら目を背けている姿が描かれていた。こうした状況にいる人は、息苦しさを感じながらも、象が怖いので息をひそめている。誰も象の存在に触れない。こんなふうに「そこにある」にもかかわらず、「なかったこと」になることを、「部屋のなかの象」という。象が暴れないように、人々はそれを見ようとせず、それについて語らなくなる。こうした現象は、性の問題ではよく起こることだという。

性に対する語りにくさを導入として、ここから米国のTCの一つ、アミティ（Amity）で行われているワークをいくつか紹介していただき、全員で体験した。まず、『一緒に象の絵を描こう』の課題では、受講者が4、5人のチームに分かれ、ホワイトボードに象の絵を描いていく。チームのメンバーは一人ずつペンを手にして、順番に、ファシリテーターが指示した部位だけを描く。例えば、「鼻を描いてください」「次は耳です」など。そうして完成された象の絵を見ると、チームでまったく違う象ができあがっていた。誰もが知っている象を同じ手順で描くだけなのに、メンバーが思い浮かべる象の姿は違っており、部位を集めるだけでは全体像が完成しないのかもしれない。

次に、各人が1枚ずつ配布された紙に『象の絵』を描いてお互いに見せ合うと、これもまた異なる象の姿が現れた。チームで一緒に描く体験とも違う。どちらのワークも正解があるわけではなく、あいまいな課題に最初のうちは戸惑いの表情も見られた。しかし、チームで作業を行うなかで、メンバーとの会話が自然に弾み、答えがないからこそ多様な感想に触れることができたように思う。開始からほどなくして会場の雰囲気がやわらぎ、熱気すら感じられるほどだった。

「自分の見方」を分かち合う

象をキーワードにした課題が、さらに続いた。次は、インド発祥の寓話『盲目の男たちと象』を輪読した。日本では、「群盲象を撫（な）ず」とか「群盲象を評す」ということわざで知られているものである。複数の盲人が初めて出会う象を撫でて、自分の手に触れた部分だけで象について意見を言い合う。ところが、触れている部分が異なるために、象の全体像がちっとも見えないという話である。誰もが自分の知る現実が正しいと思って主張するものの、それは真実の一部でしかない。

読み合わせたあと、「性についての自分の見方について、他の人とわかちあうことで自分の状況をはっきりと理解でき、相手の反応の大切さがわかったという状況」について話し合った。小グループで話し合ったあと、全体のサークルで感想を共有した。次に、その反対に「自分自身についてほかの人に説明しようとしたのに、相手がそれにまったく耳を傾けてくれなかった経験」について小グループで話し合い、全体での共有を行った。最後に、「性に対する解釈や理解が、自分と周囲でまったく異なっていたという意味で『象』であった状況」を挙げていった。

どんなことでも見方は人それぞれ異なるが、お互いにそれを伝えあうことがなければ、そんなあたりまえのことも忘れてしまいがちである。とりわけ性に対する見方は、個人差が大きい。世代やセクシュアリティによっても異なるだろう。自分が撫でた『象』の一部、つまり自分自身の体験や捉え方だけでは認識できないことがある。「相手の反応」は、自分の気づきを深めてくれるものにもなるし、反応次第で関係性を閉ざすものにもなる。お互いの意見の違いを認め合うことが対人関係の基本となる。サークルを体験しながら、対話の重要性が実感できた。

サークルの作りかた

ここから、ワークショップはサークルの基礎の学習に進んだ。

『サークルの基礎 ～物理的・感情的な雰囲気～』というプリントを読み合わせながら、安心して話せるサークルを作るための安全な場について考えた。サークルの基礎となる「物理的な環境」の説明から始められた。サークルは、部屋をきれいにして、人数分の椅子を用意することから始まる。椅子は同じ高さで、同じ

間隔を空けて、円座に並べる。部屋には、ホワイトボードやゴミ箱、どの椅子からも見える飾りがあることが望ましい。中央には、膝よりも低いテーブルを置き、メンバーの視線が遮られることなく、座っているお互いの姿が見えるようにするのがポイントとされた。また、サークルという特別な時間を守るために、その時間は誰にも邪魔されないことも大切である。

こうしたサークルを作るときの物理的な環境設定が、「感情的な雰囲気」を生み出す。感情的な雰囲気は、誰もが幼少期から感じとり、影響を受けてきたものである。人は自分のまわりの感情的な雰囲気に敏感である。幼い子どもに対して、身近なおとなは感情的な雰囲気の「温度」を設定する。子どもにとって、「そこにいたい」と思えたり、「いたくない」と感じたりしたのはそのためである。物理的な環境によって、感情的な雰囲気を感じとることもある。例えば、部屋の飾りつけから「特別なことがある」とわかったり、相手の雰囲気から、感情的な雰囲気を感じたりするときもある。このように、物の見えかたや感じかたから、人々は感情的な手がかりを得ている。

説明のあと、「自分の人生で経験した物理的環境や感情的雰囲気」について考えた。研修では、「性について話したとき」という場面が設定され、性の話題で楽しめたときの物理的な環境がどのようなものであり、なぜ、それを好ましく思えたのかを小グループで話し合った。次に、同じく性について話した場面について、不愉快と感じたとき、うんざりしたり、怯えたり、寂しいと感じたりしたときの物理的な環境を話し合った。

話し合いのあとに、サークルの適切な人数やサイズに合わせた対話の方法について解説された。一般的には、12 人を超えると、親密になったり成長しあう関係づくりをする場になりにくい。大勢のグループの前だと、自分の問題を分かち合うのが難しくなるため、適宜、小グループに分かれるなどして心地よく話せる場にするとよい。また、サークルの最初の経験がすばらしいものになることが重要である。とくに、第一印象は大切であり、ポジティブな体験ができれば、サークルの意味が体験的にも理解される。

質疑では、安全な場づくりとして、物理的空間の工夫のほかに、時間やペースなども重要だという意見が出た。もちろん、時間やペースは参加者に合わせて進めることが大切である。

織り込まれた感情について語り合う

サークルでの最後の課題は、『感情の色合い ～私たちのタペストリー～』であった。「この部屋にいる全員が、自分たちの環境の感情的な色合いや雰囲気に影響を及ぼしています」から始まる文章を読み、自分自身の「外側や内側を包んでいる感情のタペストリーの色」を考えるワークである。

さまざまな色の糸が編まれたタペストリー（織物）のように、幼いときから体験してきたいろいろな感情

によって、「私たち」は作られている。色の変わり目、結び目、小さなほころびなど、感情のタペストリーに目を向けると、自分の人生における出来事が見えてくる。目立つ模様もあれば擦り切れた部分もあり、滲んだ色や単調な色もあるかもしれない。「今のような感情のあなたになったのは、何があったからですか？」という問いかけによって、小グループではお互いの人生の体験にわずかながらも触れることができた。

タペストリーは、私たちだれもを「人間」にしていく糸であり、その始まりの糸を辿っていくことで、さまざまな関係性と感情に思いを馳せることができる。自分の感情を探索するワークは、エモーショナルリテラシー〈感識〉と呼べるものであり、性に対する意識や態度に気づくSARにつながる有意義な体験となった。

サークル体験を通して

藤岡氏のファシリテートで進められたサークルは、２時間弱があっという間に感じられた。軽やかに楽しめる課題のなかで洞察が得られたり、深い話をしながらも気持ちが軽くなったり、ワークの構成や流れも工夫されていた。何より、出会ったばかりの受講者がサークルのメンバーとして、〈つながり〉や〈安心〉を感じたというのは驚くべきことであろう。もちろん、研修のテーマである「性と対人関係について語る安全な場づくり」に関心がある人々は、こうした学びへの動機や準備性も高いといえるが、一人ひとりの考えを大切にするというサークルの理念が安全な学びの場をつくり、集団の凝集性を高めたのだと考えられた。

今回の研修で取り組んだ、性に対する自分の〈感識〉を高めることは、まさにSARの目的と重なるものである。性的な刺激への反応を理解することも大切だが、自分自身の生い立ちや経験によって編み込まれた感情のタペストリーに気づき、性にまつわる感情がどんなふうに形作られてきたかを理解することから始めるのもよいのではないか。

サークルという安全な場で、お互いに気持ちを分かち合う体験をすることは、これからの性教育を考えるうえでも重要である。性教育や性の支援を行う際には、連携やチームが大切といわれるものの、それが理念的なものにとどまっていたり、連携が単なる分業で終わっていたりすることも少なくない。包括的セクシュアリティ教育の柱である「関係性」とは、子どもに「教える」ものではなく、子ども自身が「体験」しながら学ぶものである。性やセクシュアリティの多様性を知るにも、そもそも人は多様であることが前提にされるべきだろう。

SEE研修では、引き続き体験を通した学習と教育や支援の場づくりを行っていく予定である。

JASE 性教育・セクソロジーに関する資料室

資料室について

JASE資料室は国内外の性教育、性科学等に関する文献資料を収集している開架式資料室です。文献資料の数は約６万点以上、現在も日々、増え続けています。性教育、セクソロジーに関する調査、研究のためにご利用いただけます。人間の性に関心がある方、ぜひ足をお運びください。

資料室利用方法

【閲　覧】必ず事前に電話で予約が必要です（tel 03-6801-9307）。貸出業務は行っておりません。
【開室日・時間】しばらくの間、月～金曜日 11：30 ～ 16：30
【休室日】土・日曜日、祝日、年末年始　※この他、会議等で臨時に休室することがあります。
【コピーサービス】コピー料金は用紙サイズにかかわらず１枚 10 円です。著作権法の許容する範囲で行うものとします。
https://www.jase.faje.or.jp/pub/archive.html

収集文献・資料

統計・調査報告書、ジェンダー・フェミニズム、性教育一般・性教育の歴史的資料、国内雑誌、障害者、セクソロジー（自然科学系、人文・社会学系）、民俗学・文化人類学・風俗、性研究史・性学史、教科書・指導書・学習指導要領、幼児期～青年期、国内学術誌、国際（海外団体資料・海外学術誌）、高齢者・家族問題、文学・評論・エッセイ・文庫・新書、官公庁資料、JASE刊行物、映像資料、個人論文、雑誌記事、新聞記事、絵本・写真集・マンガ、江幡・篠崎・朝山・石川・ダイアモンド文庫、ほか。
https://www.jase.faje.or.jp/cgi-bin/search1.cgi

いつきの“ヒューマン・ビーイング”

人権について考える ㉒

土肥いつき

京都の公立高校教員。24 時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

「リビングライブラリ」で伝えたいこと

前号ではリビングライブラリのはじまりについて書きました。今号には、リビングライブラリを通じて生徒たちに伝えたいことを書くことにします。

2022 年 6 月号（No.135）で書いたように、わたしは「人権は『思いやり』ではない」と言い続けています。では、わたしが考える人権学習とはどんな学習なのでしょう。その答は 1 年生のはじめにおこなう世界人権宣言の授業で伝えることにしています。それは「どのようにすれば人権が守られた状態にある社会をつくることができるのかということを学ぶ学習」です。ここでのポイントは「つくる」にあります。「つくる」ためには「考える」だけでなく動かなければなりません。また「つくる」ためには「道具」が必要です。その道具の使い方を学ぶのが人権学習であると考えています。道具の使い方を学ぶためには、例えば、すでにそんな社会をつくるために動いている「人」、あるいは「知識」や「歴史」と出会うことが必要です。だから人権学習にはさまざまな出会いを準備しています。

では、わたしは人権学習を通して、生徒たちにどんな「知識」「歴史」「人」と出会ってほしいと思っているのでしょう。例えば部落問題学習では、歴史上のトピックとして、江戸時代の渋染一揆、あるいは全国水平社の設立、なかでも水平社宣言の起草にかかわった西光万吉の人生がとりあげられることがよくあります。しかし、わたしはこのようなトピックを教材化することは、単に生徒たちの中に英雄的行為や英雄の存在を印象づけるだけのことになりかねないと思っています。子どもの頃わたしは、歴史神学の研究者である父親に「歴史とは何か？」という無謀な質問をしました。すると父親は「歴史とは重層的なものである」「歴史とは発展するものではなく展開するものである」と答えました。つまり、英雄や英雄的行為は、それ単独で起こるのではなく、歴史的行為として起こるということです。にもかかわらず、それのみをトピックとしてとりあげることは、その背景にあったさまざまな人やできごとを生徒たちから隠してしまい、あたかもその人やそのできごとのみが社会を変えていったという誤解を与えてしまうのではないかと思うからです。「人」についても同様であると思います。大きな声や大きな言葉が跋扈する今だからこそ、そうしたものの陰に隠れた小さな声や小さな言葉を大切にしたいと思っています。「本」(注)のみなさんは、学生や会社員といった、一市民です。そんな名もなき人が、歴史に翻弄されたり、時には日常を壊されたりしながらも、それでも日常を生き続ける中で経験したこと、考えたこと、感じたことと出会ってほしいと考えています。

「本」のみなさんの語りには共通するものがあります。それがわかったのは、「本」のみなさんでシンポジウムをした時です。バラバラな社会背景を持つはずのみなさんであるにもかかわらず、「しんどいなと思った経験」を語ってもらうと、口を揃えて「他者との違いに気づいたこと」と語られました。そこで「みなさんにとって『フツー』ってなんですか？」と質問すると「まわりの人」という答が返ってきました。おそらく、ほんとうはまわりの人も多様な存在です。でも、きっとそれがわからない状況におかれているのでしょう。そしてそこから「自分をキライ」になっていかれます。そんなみなさんに「なぜ今ここで語れるようになりましたか？」と質問すると、話は一気にポジティブになりました。それぞれがそれぞれにとっての「仲間」との出会いと、それを通じた自らの変わり目について語られました。そして、それぞれの経験に基づいた「語れる関係」の大切さを生徒たちに強調されました。

おそらくは「フツー」をつくりだすのは、「本」のみなさんをとりまくわたしたちです。しかし、わたしたちもまた、まわりの人を見て「フツー」であると感じています。そうした「架空のフツーの他者」が架空でしかないことを顕在化させるためには「語れる関係」、すなわち「仲間」の存在が必要であるということが、リビングライブラリを通して伝えたいことのうちのひとつです。次号には、今号では書ききれなかったひとりひとりの「本」のことを書きたいと思います。

（注）前号（12 月号 No.141）を参照。

多様な性のゆくえ
One side／No side [69]

宮田 一雄
みやた　かずお
ジャーナリスト。公益財団法人エイズ予防財団理事、特定非営利活動法人エイズ＆ソサエティ研究会議事務局長。

感染症対策の革新と伝統

M 痘（サル痘）のアウトブレークについて当コラムで取り上げたのは昨年 10 月だった。おさらいしておくと、これまでアフリカにほぼ限定されていた流行が大陸を超えて広がり、昨年 7 月 23 日には世界保健機関（WHO）が「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」(PHEIC）を宣言している。アウトブレークの中心は欧米諸国だったが、日本国内でも 2 日後の 7 月 25 日に最初の患者が確認されている。

ただし、世界全体でみると、流行のピークは PHEIC 宣言から 1 カ月もたたないうちに越えたようで、欧米諸国の症例報告も急速に減少していった。

国内でもこれまでのところ散発的な報告にとどまっている。国立感染症研究所の『複数国で報告されているサル痘について（第 4 報)』によると、国内で確認されたサル痘症例は昨年 11 月 9 日時点で 7 例である（欄外下アドレス参照)。

『うち 3 例は海外渡航歴があり、2 例は海外渡航歴のある者との接触が確認されているが、9 月下旬以降に探知された 2 例については海外渡航歴や海外渡航歴のある者との接触が確認できていない』

その後、12 月 25 日には 8 例目の症例発表があった。つまり、国内でも感染がすでに起きているのだが、その感染が次から次へと広がる事態にはなっていない。感染研の第 4 報はサル痘の症状や対応策、海外の流行状況なども説明している。そちらも見てほしい。

もちろん、感染症の流行には予断も油断も禁物であり、予測は難しいのだが、2022 年は何かと意気阻喪するニュースが多かったこともあって、少しほっとした気分になる。欧米諸国では、初期段階で症例報告の 90% 以上を占めていた MSM（男性とセックスをする男性）のコミュニティで、いち早く情報の収集と提供、そして注意喚起に動いたことが感染拡大を抑える力になったのではないか。

国内でもエイズ対策や HIV 陽性者支援に取り組む NPO が勉強会やサル痘情報の特設サイトを開くなど対応に乗り出している。初動の対応がいかに大切か、そのことを改めて感じつつお正月を迎えられた。HIV/ エイズの厳しい流行を体験してきたゲイコミュニティの人たちがいち早く海外情報を把握し、医療の専門家と協力して動いたことにも感謝しておきたい。

ただし、しつこいようだが、これで「ああ、よかった」と終わりにできないのが感染症対策の難しいところであり、誤解を恐れずに言えば魅力でもある。予測可能な事態に丁寧に対応することで、予測困難な事態に備える基盤も整えることができる。

「いまある危機が機会にもなる」などと、妙に説教臭いことも言いたくなるのは高齢化のせいか、もともとの性格か。ま、その両方でしょう。

サル痘は未知の感染症ではなく、ワクチンもすでにある。国境を越え、情報がいち早く共有されたことで、地域を超えたアウトブレークは何とか抑えられたものの、アフリカにおける流行は続いている。

希少な感染症に苦しむ人がいても、私が影響を受けるわけではないからと、無関心なままでいたら、それがいつか予期せぬ危機を生むことにもなる。

予期せぬとはいっても、いざ流行が拡大してから振り返れば、国際的な経済の状況や政治環境、人びとの生活スタイルの変化などが、拡大要因として確認できることもある。エイズ対策ではいま、そうした要因への対応が Social Enabler として重視されていることは、このコラムでも紹介した。

サル痘ウイルスの自然宿主は実はサルではないという。病原体の発生源に対する差別や偏見にもつながりかねないことから WHO は昨年 11 月 28 日、名称を「M 痘」に変更するよう推奨した。PHEIC 検討段階で課題として取り上げられ、公募を経て決定したという。M 痘の M はモンキーの頭文字。1 年間の移行期間を経て完全に変更するという。

M 痘？ あ、サル痘のことね。そんな状態もしばらく続きそうだが、この 1 年が、できれば「のど元過ぎれば、熱さ忘れる」という感染症対策の伝統を変えていく移行期間にもなってほしい。

https://www.niid.go.jp/niid/ja/monkeypox-m/2596-cepr/11547-monkeypox-ra-1104.html

BOOK GUIDE
今月のブックガイド

ジェンダーレスの日本史
古典で知る驚きの性

大塚 ひかり 著
中央公論新社
定価 990 円（税込）

古典にみる日本の性文化

日本でも昨今、著名人の LGBT 関連のカミングアウトは珍しくなくなったが、フォークの大御所歌手、吉田拓郎のそれにはとても驚いた。かつて、新人だった原田真二のデビューを後押しした吉田だが、原田に対する思いが昂じ冷静ではいられなくなり、プロデューサーの仕事を降りたという、なかなか真摯な回想だった。

いくら引退間際の歌手のカミングアウトとはいえ、1970 年代を代表するアーティストである吉田拓郎のネームバリューを考慮すれば、アメリカでいえばボブ・ディランがバイセクシュアルを宣言するようなものなのに！　むしろ冷めた受け止められ方しかされなかったことは、日本独特の性をめぐる状況をそこに見出さざるを得ないだろう。

LGBT 関連の研究者や活動家は日本のセクシュアリティ／ジェンダーをめぐる状況は欧米に比べて遅れている、という見方いっぺんであるが、よくよく考えてみると上記のような不思議な事象は少なくない。三島由紀夫が終戦後まもない時点で、カミングアウト小説『仮面の告白』をもって文壇のど真ん中から登場したこと、日本ではアメリカのようにゲイバーへの警察権力による手入れがほぼ行われなかったこと、近代化を図った明治以降、尚武の風潮のなかでも歌舞伎のような性別越境の表現が根絶されなかったこと…。あるいは、私自身、30 年以上前からメディアでカミングアウトをしていても、保守派などからの政治的な批判に晒されたことがなかったという事実！

大塚ひかり氏の『ジェンダーレスの日本史』は、一見因循で性的少数者への差別がてんこ盛りのように思われがちな日本社会が、上記のように一皮剥くと案外、性的には実に多様性に富み、性別の境界も曖昧模糊だということを教えてくれる。

古事記などを見れば、そもそもこの国の創生からして性別のはっきりしない神々によってなされているわけで、イザナキのように男神でありながら子を生む神⁉まで存在している。またヤマトタケルのごとく武勇に勝る神が女装をしたり男とまぐわったりすることもある。日本においてはむしろ、「男女両性のパワーなり美を具有する者こそが最強という思想がここにあると同時に、パワフルな存在にとっては『男女の属性は越境可能である』と、そんなふうに昔の日本人は考えていたと思う」と著者は指摘する。

本書はそのように、西洋的な尺度では計り切れない日本の性文化を、戦国時代に日本を訪れた西洋人宣教師の言葉や、近代初頭にこの国を旅したイザベラ・バードのような旅行家の視点と対比させることで鮮明に浮かび上がらせる。そして、その緩やかでおおらかなその性の背景を、日本がその深層に母系的な社会の傾向を強く残しているところに求める。

最新の研究では、「卑弥呼の時代には祭政未分化で、女は祭祀、男は政治といった明確な役割分担はなく、男女共に祭祀に関わっていた」というのには驚かされる。また、古墳時代前期には女性の首長というのが３～５割も存在していたという！ つまり、天照大神をあげるまでもなく、日本は女性が政治的にも力を持っていた。

女性の「立ちション」の歴史的考証から始まる本書は（笑）、日本の古典に現れる数少ないレズビアンの物語や、トランスジェンダーの記録、近世以前、離婚率が高かった事実（つまり、家族は流動的なものだった）…等々、とにかくネタが豊富で、読んでいて最後まであきさせない。そして、過去を無邪気に礼讃するばかりではなく、そこに現在の視点からの差別批判なども繰り込んで検証しているところが、この歴史探訪に深い奥行きを与えている。　　（作家　伏見憲明）

研究会、研修会等の情報を下記まで、郵送または、
Fax03-5800-0478でお寄せください。
〒112-0002　文京区小石川2-3-23春日尚学ビル B1
日本性教育協会「JASE ジャーナル」係

SEE 性教育アカデミー2022

SEE（Sexuality Education & Empowerment）主催
JASE（日本性教育協会）協賛

生きる力をつけるＳＳＴワークショップ

性と対人関係に課題をもつ当事者の回復を支援するSST

【日　時】2023年３月25日（土）
13時～17時（受付 12時40分～）
【場　所】同志社大学今出川キャンパス
良心館 207教室
【参加費】4000円

対面研修

定員　15名

SEE性教育アカデミー2022では、**支援者自身の価値や態度に気づく体験型ワークショップ**を行ってきました。

安全な関係性づくりのための対話の手法（サークル）に続き、今回のテーマはSST（ソーシャルスキルトレーニング）です。SSTは、**性と対人関係に課題をもつ当事者の回復支援にも有益な援助スキル**であるのはもちろん、**支援者や教育者に求められる関係性スキル**も高めます。

前田ケイ先生から**SSTのスピリット**を学ぶ貴重な機会、ぜひご一緒に！

スケジュール

12：40-13：00	受付（13：00－13：05主催者挨拶）
13：05-15：40	SST体験ワークショップ（前田）
15：40-15：45	休憩
15：45-16：35	性に係わる支援に活かすSSTについて対談（前田・藤岡）
16：35-17：00	わかちあい

申し込み方法（要事前予約）

■Peatixでクレジット払い
https://see-sst.peatix.comをPeatixで検索し、申し込みと支払いを完了してください。

＊本講座は基本的にPeatixでのお申込みを優先させていただいております。口座振り込みをご希望の場合は下記までご連絡下さい。事務局（kansaishy@gmail.com）

講師プロフィール

前田ケイ

ルーテル学院大学名誉教授、SST普及協会SST認定講師及び顧問。ハワイ大学社会学部社会学科卒業、BA。コロンビア大学ソーシャルワーク大学院修士課程卒業、MS。1983年より心理劇を学ぶ。1988年より東京大学附属病院精神神経科デイホスピタルにおいてSSTの日本への導入に尽力、日本各地での精神科患者のリカバリーのためにSSTが活用されるように取り組まれている。また、更生保護事業でのSSTの実践にも関わり、保護司など、支援者の養成にもあたっている。

藤岡淳子

大阪大学大学院名誉教授、臨床心理士／公認心理師。児童相談所、児童自立支援施設、刑務所などで、非行や犯罪行動のある少年と成人の教育プログラムの実施およびスーパーバイズを行う。一般社団法人もふもふネット代表理事。

3月26日（日）13：30～16：00

「国際幸せデー」イベント（講演会）　※東京性教育研修セミナー

《UNESCOからの提案》セクシュアリティをからだと心を使って学ぶ

「自分の性」を自分ものにするために、「みんなの性」をみんなでささえるために、私たち一人ひとりにできることは何でしょうか。学校が、コミュニティが、家庭ができることは何でしょうか。ユネスコが世界の人々に呼びかけている「包括的なセクシュアリティ教育」の提案を理解してみませんか。

スピーカー

染矢明日香（NPO 法人ピルコン理事長）
自身の経験から日本の思いがけない妊娠・中絶の多さに問題意識を持ち、大学在学中より学生団体ピルコンを立ち上げ、性の健康の啓発活動を始める。2013 年に NPO 法人ピルコンを設立。自分事として性の健康を伝える若者ボランティアの育成をしながら、中学校、高校、大学等で 300 回以上、4 万名以上の対象者に性教育講演を実施。思春期からの正しい性知識の向上と対等なパートナーシップの意識醸成に貢献している。

小貫大輔（東海大学国際学部教授）
東京大学とハワイ大学の大学院で性教育を学んだ後ブラジルに渡り、計 12 年間、エイズ予防、自然分娩・母乳育児の推進などで活動。2006 年に帰国して現職。帰国後は、多国籍の子どもを集める「マルチカルチャー・キャンプ」や「UNESCO ユースセミナー」を主催するなどしてきた。日本性教育協会運営委員。

会　場　国立オリンピック記念青少年総合センター（小ホール）
（東京都渋谷区代々木神園町３－１・小田急線参宮橋駅下車徒歩約７分）

申込み・問合せ先等

参加費：無料　問合せ先：criinfo@cribrasil.org
申込み：https://forms.gle/qH2eAmrfvJnE7xbN9 より事前登録
主　催：かながわユネスコスクールネットワーク（KAN）／東海大学チャレンジセンター（ユニークプロジェクト）
共　催：CRI- チルドレンズ・リソース・インターナショナル／東海大学国際学部・教養学部・児童教育学部
協　賛：日本性教育協会

2/5（日）10:00～13:00

第16回日本性科学会近畿地区研修会

今でもだいじな性のこと

オンライン開催

主な内容

10：05 ～ 10：35「ジェンダー外来から　受診者層の動向と傾向」松岩七虹（医療法人桐葉会きじまこころクリニック）
10：35 ～ 11：45「正味の話、性教育って…～射精道誕生秘話～」今井　伸（聖隷浜松病院リプロダクションセンター）
11：50 ～ 13：00「QOL の改善に低用量ピル（OC/LEP）ができること」金子法子（針間産婦人科）

申込み・問合せ先等

参加費／会員 3,000 円、非会員 5,000 円、学生 1,000 円
主　催／日本性科学会
申込み先／ https://forms.gle/H7U8Z8bCTeHTiqUG6
問合せ先／ jssskinki@gmail.com

▶▶ 3月27日（月）～28日（火） ◀◀

第８回UNESCOユースセミナー　※東京性教育研修セミナー

頭と心と体を使ってジェンダーとセクシュアリティを理解する ワークとダンスと芸術表現の出会い

「UNESCOユースセミナー」は、「心の中に平和の砦をつくる」というユネスコの理念と、SDGsの17の目標を実現するために、毎年一つのテーマを選んで頭と心と体を使って深く考え、話し合い、表現するセミナーです。今年のテーマは「ジェンダーとセクシュアリティ」です。人権の概念に基づいた「包括的セクシュアリティ教育」について、みんなで一緒に考えてみませんか。

プログラム（仮）

第１日目

10:00 ～　開会・アイスブレイク
13:00 ～　ジェンダーとセクシュアリティをめぐる世界の課題・日本の課題
15:00 ～　ワークショップ
19:30 ～　グループごとのワーク

第２日目

8:30 ～　前日のふりかえり
9:00 ～　ビオダンサ
10:30 ～　芸術表現のアクティビティ
13:30 ～　グループごとのワークの発表
16:30 ～　クロージング

会　場　国立オリンピック記念青少年総合センター（小ホール）
（東京都渋谷区代々木神園町３－１・小田急線参宮橋駅下車徒歩約７分）

申込み・問合せ先等

参加費：5,000 円（食費・宿泊代を含む）
申込み・問合せ先：criinfo@cribrasil.org より事前に受付。基本的に学校やユースグループ単位で参加受付。
主　催：かながわユネスコスクールネットワーク（KAN）／東海大学チャレンジセンター（ユニークプロジェクト）
共　催：CRI- チルドレンズ・リソース・インターナショナル／東海大学国際学部・教養学部・児童教育学部
協　賛：日本性教育協会

3/19(日) 13:00～16:30

第14回　臨床現場のための性感染症最新講座

HIVと性感染症 ― 予防と治療の最新情報

主な内容

13：45 ～ 14：45【特別講演】「増える STD：今後の対策」赤枝恒雄（赤枝六本木診療所院長）
15：00 ～ 15：40【講義Ⅰ】「多剤耐性マイコプラズマとその治療」安藤尚克（NCGM エイズ治療・研究開発センター医師）
15：50 ～ 16：30【講義Ⅱ】「増える梅毒：現場からの報告」塩尻大輔（NCGM ACC ／ PHC 院長）

会　場　国立国際医療研究センター（NCGM）研修棟５階大会議室
（東京都新宿区戸山１－２１－１ 都営地下鉄大江戸線若松河田駅徒歩５分）

申込み・問合せ先等

参加費／ 5,000 円（財団維持会員は 3,000 円 同時入会可）　定　員／ 50 名（先着順）※状況により変更の可能性あり
主　催／公益財団法人 性の健康医学財団
申込み・問合せ先／ https://www.jfshm.org/

すぐ授業に使える

性教育実践資料集

中学校改訂版

〈主な内容〉

第１章　中学校における性教育（性教育を実践するにあたって／性教育の目的と意義）

第２章　性教育の実践（性教育の現状と実践の課題／学習指導要領における性教育の取り扱い／性教育の指導体制／指導計画の作成／性教育実施上の留意点／家庭・地域との連携／中学校の性教育の今後に向けて）

第３章　指導事例（各学年における指導計画と指導の流れ／８つの１年生の指導事例／６つの２年生の指導事例／６つの３年生の指導事例／７つの個別指導事例／５つの組織の指導事例）

第４章　参考資料（性行動経験率／性的なことへの関心割合／自慰経験率／性的関心の経験割合の推移／性へのイメージ／性感染症報告数の推移／梅毒患者報告数の推移／HIV・エイズ感染者の動向／人工妊娠中絶実施率及び推移／用語解説）

定価 2,200 円（税込）　B5 判・224 ページ

「若者の性」白書

第8回　青少年の性行動全国調査報告

〈主な内容〉

序　章　第８回「青少年の性行動全国調査」の概要

第１章　変化する性行動の発達プロセスと青少年層の分極化

第２章　青少年の性規範・性意識からみる分極化現象

第３章　家庭環境や親子のかかわりの違いは青少年の性行動に影響を与えるか

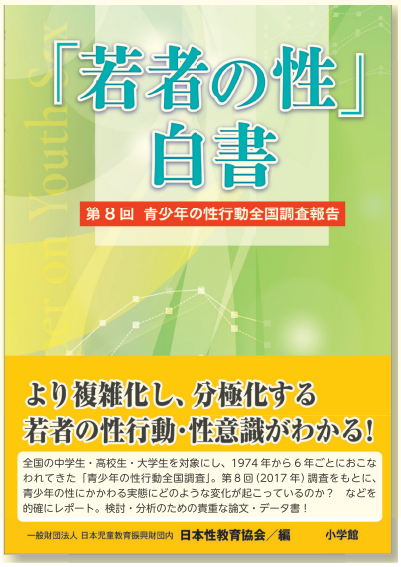
第４章　知識・態度・行動の観点からみた性教育の現状と今後の課題

第５章　青少年の性行動と所属集団の性行動規範

第６章　青少年の避妊行動の実態と包括的性教育の可能性

第７章　性的被害と親密性からの／への逃避

第８章　青少年の性についての悩み
～自由記述欄への回答からみえるもの～



定価 2,420 円（税込）Ａ５判・256 ページ

編／一般財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会　　発行／小学館

全国の書店にて、ご購入いただけます！